

ら柳樽五荷・雁一對・折五合を、晦日には小袖一重・袴を歳暮の祝儀として贈られた。

隆元卿山口滞
在の事績
○天文七年

天文七年正月四日、隆元卿は築山館に年賀出仕し、義隆が新春に一族は勿論、被官にも対面する嘉例に従ひ、義隆に謁して賀礼を述べられた。それから八日に法泉寺を見物し、十二日の大内氏弓始には義隆麾下の射手六人がその技を競うたので、卿は之に招かれて参観せられた。同月二十一日には築山館に到り、饗応に預けられた。それで二十四日義隆が卿を訪問するや、内藤隆世・弘中隆兼をして寄馬を張行せしめた。そして翌二十五日に卿は再び湯田に赴かれた。又二月一日には築山館に出仕し、義隆が七日に山口郊外の氷上山興隆寺に赴いた時には、之に鶴の折五合を進上せられた。同月十三日の永上山妙見宮の祭礼には、卿も亦そこに赴いて奉納の童舞を見物せられることとなったので、義隆は卿の為に特に棧敷を準備させた。同月二十日の大内氏沙汰始には、卿は吉見丹後守の案内に依って、荘麗なる築山の館を隈なく見物し、二十九日に妙見宮に参社し、更に同日、江口邸に赴いて馬術の稽古を行はれた。尋で三月七日、山口本町に火災が起り、約百戸焼失した時、卿の従者は直ちに馳せ附けて鎮火させたので、義隆は内藤彦太郎を使者として大いに之を褒めた。同月十一日、築山館に能が催されたので、卿は赴いて之を鑑賞し、二十日、妙見宮の能見物にも出掛けられた。四月一日、更に築山館に出仕、同月十二日、宇野談義所の勸進能が始まったので、卿はその初日を見物し、それが六日間続行された内、二日間見物された。同十四日、義隆から鱈五喉・鴈三羽を贈られ、廿日、更に鮎十喉を贈られた。五月一日及び五日、築山館に出仕、十六日には陶邸に、十八日には築山館に赴いて、それぞれ犬追物を見物された。六月一日に築山館に出仕、十二日義隆から海月一折を贈られた。その後、卿は或は義隆の棧敷に出

完璧な史料による 元就伝の決定版

三卿伝編纂所編

渡辺世祐監修

毛利元就卿傳



目次

巻頭言 毛利 元就
序 渡辺 世祐

第一編 毛利氏の勃興

- 第一章 戦国時代中国の形勢
- 第一節 序説
- 第二節 諸氏の割拠
- 第一 赤松氏
- 第二 宇喜多氏
- 第三 山名氏
- 第四 細川氏
- 第五 備後の諸氏
- 第六 安芸の諸氏
- 第七 石見の諸氏
- 第三節 大内氏の強盛
- 第四節 毛利氏の勃興
- 第二章 毛利氏の相統
- 第一節 毛利氏の祖先
- 第二節 毛利氏の所領
- 第三節 毛利氏の誕生
- 第四節 毛利氏の武功
- 第一 有田城外の合戦
- 第二 赤屋小国の合戦
- 第三 壬生城の攻陥
- 第四 鏡山城の攻陥
- 第五節 嫡子隆元卿の誕生
- 第六節 毛利氏の相統
- 第七節 毛利氏部将としての卿
- 第二 安芸銀山城外の合戦
- 第三章 卿との誓約
- 第一節 天野興定との誓約
- 第二 大内氏帰属
- 第三章 卿と大内氏帰属
- 第一節 卿と大内氏との絶交
- 第二節 安芸諸氏の征服
- 第一 安芸諸氏の征服
- 第二 備後諸氏の征服

- 第三節 隆元卿の山口滞在と元服
- 第四章 毛利氏との来襲
- 第一節 毛利氏との勢力
- 第二節 毛利軍の準備
- 第三節 毛利・大内両軍の交戦
- 第四章 大内義隆の出雲遠征と卿の従軍
- 第一節 義隆及び卿の出征
- 第二節 大内・大内義隆の交戦
- 第三節 大内軍の敗退と卿の苦戦
- 第六章 芸備の経略
- 第一節 府野の合戦

刊行に際して

▼本書は、昭和十九年(一九四四年)上巻が刊行され、下巻の原稿は、焼失あるいは行方不明といわれてきましたが、これは毛利家文庫(山口県文書館)に秘蔵されておりました。この上下巻を一冊にまとめて、昭和五十九年に小社から刊行されたものを、このたび「特装版」として再復刻します。

▼本書は、毛利家に伝わるあらゆる記録、文書類を、年月をかけて編纂した、近代実証史学の粋ともいえる内容で、その精緻をきわめた記述は、たんに毛利元就の一代記にとどまらず、中国地方の戦国時代について、最高最大の根本史料として珍重されています。

▼本書の校訂(校正も含む)は、山口県地方史学会名誉会長の三坂圭治氏。校正および索引の作成は、利岡俊昭氏によるものです。

- 第二節 第三子隆景卿の小早川家相統
- 第三節 第二子元春卿の吉川家相統
- 第四節 卿の隠居と隆元卿の家督相統
- 第五節 備後山名氏の滅亡
- 第六節 井上党の誅戮
- 第七節 諸氏の服属
- 第一 平賀氏の服属
- 第二 宮氏の服属
- 第三 江田氏の服属
- 第四 山内氏の服属
- 第五 多賀山氏の服属
- 第八節 軍法度の伝達

- 第二章 大内氏の懐柔
- 第七節 大内氏諸將の懐柔
- 第八節 永安・矢野保木両城の攻陥
- 第一 永安城の攻陥
- 第二 安芸矢野保木城攻陥
- 第二章 厳島合戦
- 第一節 卿の作戦計画
- 第二節 晴賢の作戦計画
- 第三節 戦闘開始
- 第四節 晴賢の敗死
- 第五節 卿の凱旋
- 第三章 防長の経略
- 第一節 周防の経略

- 第一 玖珂郡の征服
- 第二 都濃郡への進撃
- 第三 大友義鎮との交渉
- 第四 須々萬の沼城陥落
- 第五 富田の若山城陥落
- 第六 大内義長の山口没落
- 第七 大内氏の遺宝継承
- 第二節 長門の経略
- 第一 大内義長の敗死
- 第二 大友義鎮の態度
- 第三節 防長両国の処分
- 第四節 大内氏残党の平定
- 第五節 卿の隠退希望と隆元卿の第三編
- 第三編 卿の一族団結の教訓
- 第一章 卿の教訓状
- 第二章 三子の奉答
- 第三章 教訓状の効果と影響
- 第一節 卿の存命中
- 第二節 中国戦役
- 第三節 宮廷経言卿の小笠原氏継嗣
- 第四節 木下秀俊の毛利氏経嗣問題
- 第五節 関ヶ原の役
- 第六節 四境戦争
- 第四編 中国の経略
- 第一章 石見の経略
- 第一節 佐波興連・益田藤兼の隠居
- 第二節 備中の経略
- 第三節 小笠原長雄の降服
- 第四節 福屋隆兼の敗走
- 第五節 隆元卿の土気振興
- 第六節 大森銀山の起源
- 第一 大森銀山の起源
- 第二 大内・大内義隆の争奪
- 第三 毛利・大内両氏の争奪
- 第四 卿の領有
- 第五 御料所としての銀山進越

- 第三節 隆元卿の人物
- 第四節 隆元卿の相統と元服
- 第五節 隆元卿の薫育
- 第六節 隆元卿の結婚
- 第七節 吉川・益田両家の婚約と卿の媒酌
- 第五編 四国・九州の経略
- 第一章 伊豊の経略
- 第一節 伊豊の形成
- 第二節 卿と河野氏
- 第三節 毛利軍の伊予出征
- 第二章 豊前・筑前の経略
- 第一節 卿と大友義鎮



- 第一節 尼子勝久の挙兵
- 第二節 勝久の出雲経略
- 第三節 備後・美作の反乱
- 第一 備後神辺の反乱
- 第二 美作高田の反乱
- 第三 卿と織田信長との提携
- 第四節 隆元卿の出雲出征
- 第五節 出雲諸城の攻陥
- 第六節 大友氏との関係
- 第七節 隆元卿の班軍
- 第八節 隆元卿の班軍
- 第九節 浦上宗景の策動
- 第五章 卿の薨去
- 第一節 病 氣
- 第二節 死 去
- 第三節 葬 儀
- 第四節 菩提所
- 第一 日頼寺
- 第二 日頼院
- 第三 洞春寺
- 第四 原始院
- 第五 長寿寺
- 第六 三岳寺
- 第七 仏通寺
- 第八 洞玄寺
- 第九 その他
- 附 石見豊栄神社
- 第五節 墳 墓
- 第一 安芸吉田の墳墓
- 第二 周防三丘村の墳墓

- 第二章 兵法
- 第三章 信仰
- 第一節 神 道
- 第二節 仏 教
- 第三節 基督教
- 第四章 制 法
- 第一節 乃美氏及びその子
- 第二節 三吉氏及びその子
- 第三節 小幡氏
- 第六章 逸 話
- 毛利氏年表
- 索引
- あとがき

- 第二章 即位料の献納
- 第一節 皇室の式微
- 第二節 毛利氏勤王思想の源流
- 第三章 正親町天皇の即位
- 第四章 卿の高山城訪問
- 第五章 豊受大神宮造替奉加
- 第六章 出雲の経略
- 第一節 將軍義輝の毛利・大内氏調停
- 第二節 元春卿の病氣と卿の見舞
- 第三節 卿の出雲進入
- 第四節 本城常光の誅戮
- 第五節 出雲白鹿城の陥落
- 第六節 洗合滞陣
- 第七節 伯耆の経略
- 第八節 因幡の経略
- 第九節 富田城の攻撃
- 第十節 富田城の攻撃
- 第十一節 卿の病氣
- 第十二節 富田城の陥落
- 第十三節 大内義隆の末路
- 第十四節 曲直瀬正盛の意見書
- 第一 怠勤の弁
- 第二 飲食及び居所の儉約
- 第三 歌舞を慎しむべきこと
- 第四 威徳を兼行うべきこと
- 第五 兵戦のこと
- 第六 兼聴を貴び、偏信を厭ふべきこと
- 第七 勉強と概奢との相違
- 第八 賢智に親しみ宝飾を遠ざくべきこと
- 第九 病の予防と乱の予防
- 第十五節 祝勝の能
- 第六章 隆元卿の卒去と輝元卿の相統
- 第一節 隆元卿の卒去
- 第二節 卒去後の位置

- 第二章 大内輝弘の没亡
- 第一節 輝弘の山口占領
- 第三節 隆景卿の撤退
- 第二 乃美宗勝寺の撤退
- 第一 元春・隆景両卿の撤退
- 第八節 毛利軍の撤退
- 第七節 輝元卿の再度調停
- 第六節 立花の陣
- 第五節 將軍義昭の毛利・大内両氏調停
- 第四節 毛利軍の出征
- 第三節 講和の決裂
- 第二節 將軍義輝の毛利・大友両氏調停
- 第一節 講和の決裂
- 第三節 隆景卿の撤退
- 第二 乃美宗勝寺の撤退
- 第一 元春・隆景両卿の撤退
- 第八節 毛利軍の撤退
- 第七節 輝元卿の再度調停
- 第六節 立花の陣
- 第五節 將軍義昭の毛利・大内両氏調停
- 第四節 毛利軍の出征
- 第三節 講和の決裂
- 第二節 將軍義輝の毛利・大友両氏調停
- 第一節 講和の決裂

- 第一章 文学
- 第一節 卿の文才の源流
- 第二節 和 歌
- 第三節 連 歌

■体 裁 A5判 九六六頁

■定 価 上製箱入 二万円

■予約特価 一万六千円

■予約締切 九年三月二十日

■発 売 九年四月下旬

特装版 限定五百部

▼僅小部数につき、売り切れの際はご容赦願います。

▼書店には御しませんが、同封のハキで直接お申し込み下さい。

第二章 嚴島合戦

第一節 卿の作戦計画

嚴島合戦の意義
○弘治元年

嚴島合戦は卿の生涯を画する最も重大なる事件であると共に、毛利氏の勃興史上、永遠に忘れることの出来ぬ輝しい偉業である。思ふに卿が大内氏の為に義兵を起し、僅か四千余の寡兵を以て晴賢二万の大軍を嚴島に殲滅せられたことは、独り毛利氏一族の誇りであるばかりでなく、亦日本戦史を飾る華と讃へらるべきである。併し卿が能く斯くの如き花々しい戦果を全うせられることが出来たのも、その苦心惨胆たる作戦計画による処が与って大なるものがあつたといはねばならぬ。

卿、嚴島を戦場に選ぶ

当時、安芸己斐・草津・桜尾以上佐伯郡の諸城は既に卿によって攻略せられ、嚴島も亦卿の勢力圏内に属して居た。本書第二編第三章第三節。而して晴賢は周防岩国玖珂郡に駐り、總て戦備成るを待つて一気に芸防国境を突破して、安芸に侵入せんとするの形勢にあつた。是に於いて卿は最初に毛利軍の最前線たる桜尾城と、陶軍の本営たる岩国との間に於いて晴賢の大軍を邀撃する作戦を採られた。されど軍略上、寡兵を以て大敵に対抗して必勝するには戦場として狭隘・險要なる地点を選定せねばならぬ。そこで卿は熟慮の結果、遂に嚴島をその戦場として選定せられるに至つた。

嚴島

嚴島は安芸湾の一小島で東西三十町、南北二里半余、南端を華籠崎、北端を聖崎と称する。島と本土

第二編 大内氏の滅亡

二〇五

内容見本

『毛利元就卿伝』全巻の刊行をよろこぶ

福山大学教授
広島大学名誉教授

河合 正 治

『毛利元就卿伝』上巻(昭和十九年)刊は毛利氏研究者の必携の書であるが、入手のむづかしい稀覯本となつている。また、円熟した元就後半生の活躍をまとめた本書の下巻は未刊のままであつた。今度、毛利文庫(山口県文書館)に秘蔵され、待望久しかった本書の下巻が、上巻とともに一括して刊行されることになつた。

本書は、毛利家の三卿(元就・元春・隆景)伝編さん所によつて著作されたが、長州藩では藩祖元就時代の歴史をまとめる作業に長い伝統がある。関ヶ原役後から往事をしのんで覚書・軍記の類がまとめられたが、近世中期からは藩府が本格的な編さん事業をはじめ、これが幕末・明治初年まで続いている。また、藩士諸家から提出された膨大な文書をまとめた閩関録・藩譜録なども編さんされている。これらの蓄積を引き継いだ三卿伝編さん所の事業は、大正三年から一時の中断はあつたが昭和十九年に及んだ。所長は、はじめは戦国期中国地方史の開拓者瀬川秀雄博士であり、後には室町戦国時代史の最高權威渡辺世祐博士がなつて、優秀な所員のかたがたを監修・指導して諸伝を完成させた。この書は家史ではあるが、著者らはできるだけ客観的な記述を心がけており、近代実証史学の成果の代表に数えあげられるほどのきばえである。

本書の内容は、戦国時代中国地方の形勢からときおこし、元就登場までの毛利歴代の活動に続いて、元就の運命的な相続問題にはじまり、大内・尼子両大勢力の間隙をついて芸備両国に勢力を固め、更にかれの活躍の幅のひろがりにつれて、その歴史記述の舞台は中国・四国・北九州までも及ぶ。また、元就一族の精神生活の諸方面にもふれている。記述はいちいち史料によつて精緻を極めているが、そこから歴史の表裏を汲みとることができて興味ที่尽きない。厳密に校訂され、索引も付された今度の本書の刊行は、学界だけでな



河合正治